

上田市教育委員会 7月定例会会議録

1 日 時

平成24年7月18日(水) 午後2時30分から午後4時13分まで

2 場 所

上田市教育委員会(やぐら下庁舎) 2階会議室

3 出席者

委 員

委 員 長	西田 不折
委員長職務代理者	城下 敦子
委 員	小市 正輝
委 員	山崎 順子
教 育 長	小山 壽一

説 明 員

武井教育次長、廣川教育参事、小野塚教育総務課長、倉島学校教育課長、浅野生涯学習課長、小山人権同和教育政策幹、土屋文化振興課長、黒岩スポーツ推進係長、児玉丸子地域教育事務所長、藤沢真田地域教育事務所長、掛川武石地域教育事務所長、神林中央公民館長、池田城南公民館長、大塚第二学校給食センター所長、清水上田情報ライブラリー館長

あいさつ

1 報告事項

(1) 平成 23年度 上田市教育行政に係る事務の点検及び評価について(教育総務課)

資料 1 により小野塚教育総務課長説明

城下委員

現在、懇話会の 1 回目、2 回目が進んでいるとのことだが、その議事録などはあるか。

小野塚教育総務課長

要点はこちらで控えているが、審議会ではなく特に公開もしていないので議事録は作成しておらず積極的に公表する予定も今のところはない。

城下委員

24年度の目標に追加する見込みのあるものはあるか。

小野塚教育総務課長

24年度の重点目標は既に掲げている。精査しなければわからないが、追加すべきところがあれば追加したい。大筋では、さほど大きな変更は必要ないと考えている。

小市委員

1 - の学ぶ意欲を育む授業づくりの中に、委員からの意見として「具体的にどのような学習効果、学力の向上もしくは学力の底上げがあったのかを明確にして取組の定着を図っていく必要があると考える」とあるが、これはなかなか厳しい意見である。小中連携でどのように学力が伸びたかは、テストなどを継続的にやっていないと評価は難しい。子どもたちの気持ちの高まりや関心については説明できるが、学習効果を数値として示すことは厳しい。

もうひとつは、実際に授業をやっている中学校から小学校に行く先生方にとってみると、大きな負担感があるのではないか。小学校からは大いにやってほしいという希望が出ているし、保護者からも中学の先生が来て子どもたちの学ぶ意欲や中学に対する希望が高まっているとの声もあるが、実際に小学校に出かけて指導している先生を支える体制を校内につくっていくことも大事ではないか。校長先生も教頭先生も同僚の教職員もそのことを分かっている、自分も行く機会があったら行ってみたいという気持ちが高まっていくと事業がさらに拡大するのではないか。そのことを理解頂きたい。

倉島学校教育課長

中学校にすれば、本当に大変なことだと思う。しかし、それ以上に小学校の子どもたちが意欲を持っていてくれる。また、小学校の先生方も教え方について大変関心を持っている。そうした部分も小学校の先生からの評価として出ているので、そこも大事にしたい。一方、中学校においては、教科会の先生方の協力や校長、教頭のサポートがないと、特定の先生にだけ負担がかかる。そうした課題も解決しながら、取組が深まるよう努力を続けたい。

城下委員

学校教育分野で、現場の先生方がどう評価しているのかを聞く機会が必要ではないか。

倉島学校教育課長

関係校の教頭には、今回の事業について取りまとめをして頂いている。よかったこと、課題、来年度に向けて何をどう生かすかといったことのレポートをもらっている。それを参加全校で共有しあって試行錯誤しながら進めている。

廣川参事

確かに中学校の先生の負担感が大きいのは事実であるが、小学校に行った先生は成果があったことを評価している。仕事としては大変だけれども効果は認めているというところが現場の意見かと思う。この小中連携の良さを受けて、中学校に小学生を呼んで体験授業を行う学校もあり、前向きに取り組んでもらいたい。

西田委員長

今後の方針はどうか。

小山教育長

小中連携を継続したい。昨年度は、市の予算で三中、四中、丸子北中の3校だったが、今年度はそこに五中を加えた。ただし、予算を増やして行うことは厳しい状況であり、まずは、この4校を継続したい。その成果を見てもらうことによって、次は予算を伴わない小中連携の取組をどう広げていくことができるかが課題である。二中については、県の事業として行っていたものを県が事業を打ち切った後も引続き行っている。どうしても学校に負担を掛けることになるので、どのようにできるか学校と相談しながら少しずつ広めたい。

城下委員

懇話会での評価と重点目標との繋がりがわかりづらい。評価報告書では取組が事業名となっているが、目標管理制度では事業名ではなく重点取組項目及び項目に対する方法手段となっている。目標と行政評価が別物であるように感じてしまうので工夫を要する。

また、平成24年度に関してはこの様式で他部局もやっているのだからこれでかまわないが、教育委員会の中では、1年間の一連の流れの始まりから終わりまでについて、計画に対してどういうことが行なわれ、中間ではどういうことが行なわれ、最後にはどう反省し、懇話会でどう評価を受け、それは次年度にどう繋がるかということが横一列で分かるようにしたい。シートの作り方という点では、ISOでは一連の流れを横に見たときに分かるものをつくりあげる。なおかつ、様式に当てはめるために何か別の作業などはしない。一般企業などは、日々のやっていることをそのままISOの様式に落とし込めるようにうまくつくってある。

この評価報告のボリュームを見るとたくさんの意見があり、そういう形の中にポンといれることは難しいと思うが、工夫してはどうか。

小野塚教育総務課長

重点目標という制度と教育行政の事務の点検と評価という2つの別の制度を併用しているので、様式が見つらいという指摘は当然のことだと思う。24年度の重点目標については前年度よりは分かりやすくなったつもりであり、24年度の評価のときには重点目標の取組項目が事務の点検の対象事業となってくるので、もう少しは分かりやすくなってくると思う。それぞれの重点目標の取組項目は、この事業評価シートの事業としてそのまま入れ込んであることが多く、ある程度リンクしてつくられている。違う様式になっているので見つらいとい

う印象があるかと思うが、今年も自己評価のところではP D C Aのサイクルとなるようにつくるので、分かりやすくかつ省力化となるよう検討していきたい。

山崎委員

2ページに心の教室相談員、特別支援教育支援員、巡回学習支援員とあるが、支援員とはどういうものか。また、学校の教育現場に入るのだが、立場的として先生のような形で入っているのか、それとも例えば保護者の立場で入っているのか。

倉島学校教育課長

まず、役割についてだが、ひとつには学習支援である。それから、日常生活上の支援、例えば移動とかの支援である。採用条件としては、教員資格は特に必要とはしていない。何かを教えるというよりも、その子が支援によって楽しく一日学校で過ごせるといったことを目標としている。現実的には、支援員の半分くらいは教員資格を持っており、保育士の経験がある方も半分くらいはいる。この方なら子どもをしっかり見てもらえるかどうかを考慮して採用している状況である。

山崎委員

心の教室相談員が36校に37人、特別支援教育支援員が35校に56人配置したとあり、かなり大勢が入っているという印象だが、特別支援を必要としている子ども以外の児童生徒と支援員との関わりとして、クラスの中に担任の先生がいて、もう1人先生がいるということだと思うが、他の児童生徒たちがざわつくとか気にしてしまうなどの心配はないのか。

倉島学校教育課長

何度か各学校を見ているが、担任はクラス全体に向かって授業し、支援員はその子のすぐ横やちょっと後ろにいて座った形で支援している。他の児童生徒がそちらに集中してしまうようなことはないと受け止めている。教えるときもその子にだけ聞こえるような言い方であり、授業全体に対して影響があるとは捉えていない。

山崎委員

学校訪問でクラスを見たときにも支援員がおり、子どもたちに近い目線で支援する姿を見たが、全体としてはどんな様子なのか聞いた。支援員が入ることによってプラスの面があるという認識でいいか。そのため人数が増えていることでよいか。

倉島学校教育課長

各学校によって状況が違っており、支援を要する子どもが多い場合は3人配置している。多くの学校では2人配置となっており、少ない学校については1人という配置状況である。クラス全体にプラスとなるかどうかについては、支援員が入ることを他の子どもたちもそういうものだとして受け止めておりほとんど気にしておらず、今の形でやっていきたいと考えている。さらに支援の時間数を増やせればよいのだが、予算との兼ね合いもあり引続き増額に向けて努力したい。

山崎委員

現場の先生にとっても、支援員が入ることによって授業が円滑に進んでいくという理解でよいか。

小山教育長

特別支援教育の支援員については、市全体で何時間という予算総量としての時間の限定がある。先ほど多い学校には3人配置しているとあったが、例えばA小学校については総枠として1年間で何時間といった枠を設けて配置している。年度途中で状況の変化があったときには、追加で配当するなどして対応している。また、特別支援教育支援員とは別にボランティアの支援員もお願いしている。さらに、もうひとつ別に学習支援ボランティアという形で地域の方に入ってもらうこともお願いしている。個別に子どもたちの支援をしてもらい、子どもたちの様子を見てもらう。学校の様子を地域の方に知ってもらい、学校に対する垣根をもう少し下げたいという思いがある。総合的な学習についてはだいぶ入ってもらっているが、日常的な学習ボランティアをお願いしようと進めており、そうしたボランティアも入り始めている。学校としても、支援員を配置するだけでなくボランティアにもお願いしているということは、効果があるという認識を学校も持っているということである。

廣川参事

学校からは非常に要望が多く、実際には年度末になると時間が足りないくらいであることから、現場としては上手く支援員を使っていると思われる。上田市は、他市町村に比べて支援員の配当時間が多いが、それは国の意向を受けて目一杯予算を支援員等に充てているからである。現場では、さらに配置が欲しいと常に要望がきている。

倉島学校教育課長

クラスにとっての影響だが、支援員がいないと、多動性の子どもや突然動いたり大きな声を上げる子どもたちへの対応に担任が時間を取られてしまう。また、そうした行動によって他の子どもの落ち着きもなくなる。そうした面から、クラス全体が落ち着きを取り戻し、担任は授業に集中できる非常によい制度だと考える。

全委員 了承

(2) 上田市社会教育委員の委嘱について(生涯学習課)

資料2により浅野生涯学習課長説明

城下委員

新任委員以外の年齢はどうか。

浅野生涯学習課長

清水幾子さん61歳、春原さん60歳、西田さん59歳、樋口さん59歳、安井さん64歳、竹田さん57歳です。認められれば平均年齢は58歳となる。

城下委員

若ければよいとは限らないが、委員の年齢に対する考え方はどうか。

浅野生涯学習課長

若い委員も入れたいと思うが、働き盛りの方が多く昼間の会議には出席が難しい状況もあり、このような年齢が多くなる。

山崎委員

県の社会教育委員は会議が年1回だったが、上田市の社会教育委員の会議の状況はどうか。

浅野生涯学習課長

現在は年5回程度の昼間の会議を開いている。また、研修として県外視察なども行っている状況である。

全委員 了承

(3) 上田市指定文化財候補物件の諮問について(文化振興課)

資料3により土屋文化振興課長説明

西田委員長

全国的に見てこうした出土品、特に銅印などはどんな位置にあるか。

土屋文化振興課長

これから諮問し、専門家に詳しく調べてもらった上で、指定に相応しいものかどうかを判断してもらうことになる。

全委員 了承

2 <報告事項>

(1) 平成24年度 寄附の状況について(4月~6月)(学校教育課)

資料4により倉島学校教育課長説明

全委員 了承

(2) 出前ときめきのまち講座について(生涯学習課)

資料5により浅野生涯学習課長説明

城下委員

講座が100種類となりいろいろあるが、市民のニーズはどのように汲み上げているのか。

浅野生涯学習課長

ニーズの前に、庁内の職場でどんなことを市民の方々に伝えられるかということが第一である。例えば、昨年は3.11があって防災の講座の利用が非常に多かったが、その時々で市民が選択するといった形としている。

西田委員長

このような講座をやって欲しいという市民の希望についてはどうか。

浅野生涯学習課長

ここにはない講座の要望は確かにある。その場合は、特製プログラムとして生涯学習課が窓

口となり関係課所と調整しながらプログラムをつくって出向くことになる。

全委員 了承

(3) マラソン大会・駅伝大会の開催について(スポーツ推進課・武石地域教育事務所)

資料6により黒岩スポーツ推進係長・掛川武石教育事務所長説明

全委員 了承

(4) 平成24年6月スポーツ関係市長表敬訪問者報告(スポーツ推進課)

資料7により黒岩スポーツ推進係長説明

全委員 了承

(5) 行事共催等申請状況について

(教育総務課 学校教育課 生涯学習課 文化振興課 スポーツ推進課)

資料8 - により小野塚教育総務課長説明

全委員 了承

資料8 - により倉島学校教育課長説明

全委員 了承

資料8 - により浅野生涯学習課長説明

全委員 了承

資料8 - により土屋文化振興課長説明

全委員 了承

資料8 - により黒岩スポーツ推進係長説明

全委員 了承

<その他>

神林中央公民館長

- ・ 公民館だよりについて説明

山崎委員

上田市短詩型文学祭作品募集の投稿料が1部門につき500円とあるが、この500円の
使途は何か。

神林中央公民館長

投稿は去年で1,000件ほどであるが、それを冊子とすることに使わせて頂いている。

全委員 了承

閉会